

は、男女の區別が餘り有りません。そして此種の調査は、成るべく多人數が宜敷いのであります。今回は、以上の人數より得られませなんだが、兎に角此繪畫觀察調査の結果としましては、六歳五歳とも男女通じて『三人の動作、二人の動作、三人の動作景色及家具』といふ觀察の様式が正常な

机邊より

○ペスタロッチとフレーベルとの弱點

——ハイワード氏『ペスタロッチ及フレーベルの教育觀』より——

紹介子

ペスタロッチもフレーベルも教育の目的といふことに就てはハツキリとは述べて居りません。この點に於てこの二教育家は遙かにヘルバルトに劣つて居るやうであります。

ヘルバルトは教育家の仕事に整齊と調和とを與

る見方の様です。かゝる見方の心理學上の解釋は甚だ大切で又興味あるものと思ひますが、それは、私共の力の外ですから遺憾ながら結果のみ述べて置きます。(尙ほ此種の調査を當市内各幼稚園より追々發表せられる筈であります。)

ふべき唯一の目標として人格構成といふことを擧げて居ります。ヘルバルトはその著『普通教育學』の中で「教育の唯一の目的は一つの概念——即ち徳性に概括せらる」と明かに述べて居ります。この目的から演繹せられて居るのがヘルバルトの教

育論なのであります。ヘルバルトはこの立場に在るが爲めに自然といふものに力負けをして居りません。人は自然を判断しなければならぬ、盲目的に自然に従つてはならぬ、人はその高き目的のため自然を利用しなければならぬ、屢々非倫理的であるところの自然の方法に括りつけられて了つてはならぬと斯うヘルバルトは言ふのであります。

ペスタロッチも教育の目的に關してヘルバルトの立場に似て居る節がないでもありません、しかしペスタロッチはこれを明瞭に言ひ現しては居りません。教育の目的に關する彼の意見の最もよく現れて居ると思はれるのは「ゲルトロードはその兒童を如何に教育せしか」の終りの部分であります。彼はこゝで徳と智とを磨くのが教育の目的であるといふやうに言つて居りますが又「生活の間らしさ」が教育家の目標であるといふやうにも言つて居ります、さうかと思ふと又内の充足が目的であるとも言つて居ります。この點に關しては

非常に不分明なのであります。

教育の目的は人間の本質の力と機能とを調和的に發達せさるといふより外にはあり得ないとペスタロッチは一八〇一年に言ひました。けれども一七八二年には彼は「自己の生活状態に於て生活し幸福であること及び社會の有用なる一員となることとが人の定運であり且又教育の目的である」と言つて居ります。又教育のすべての目的のエッセンスは「兒童の注意力を定着させ、判断力を鋭敏に活動せしめ、兒童の心情を高尙ならしむること」であるとも言つて居ります。

ペスタロッチの解説者はペスタロッチの教育の目的は徳性だあつたと言ひますが、以上に抽出した彼のまら／＼な教育目的の中にボンヤリ現れて居る外には彼が斯ういふことを言つたことを私は知りません。

調和的發達といふやうなことは教育改革家が何時も先づ持ち出して來る意見でありましてこれだ

げではまだハッキリした具體的な考は分らないのであります。

教育の目的に關する意見の明瞭といふことを言ひますとフレーベルも亦遺憾ながら未だしいふ點があるのであります。フレーベルの教育の目的も矢張朦朧として居ります、私はたゞフレーベルの教育の目的の中にルソーの幻影イリュージョンを發見するばかりであります。彼は次のやうなことを言つて居ります。

人は己の定運と天職とを充たすべきである、それが己自身の中に潜んで居る神的性質の再現（若しくは外的的活動的表現）である。

教育は人をして己自身及び己自身の内にあるものを明瞭ならしめ、自然と調和し神と結びしめるものである。

「人間教育」の始めの部分で彼は又次のやうなことを言つて居ります。

教育の目的は至純な、信仰心厚き、完全な、從

つて神聖な生活を造り出すことである。

けれども少し先の方へ讀んで行きますと彼は教育の目的は自由と自己決定とを以て人の生活を通して人の中に既存して居る神を實現することであると云つて居りますから前の敘述は殆んど不必要なものとなるのであります。

以上の如き神秘主義からは宜しく脱出すべきであります、フレーベルの萬有神教もかなり荷厄介なものであります。ウオーグウオーズとフレーベルは極端な萬有神論者であります。

私達は外觀の援助無しに神性を發揮すべく放任せられた多くの兒童の經驗に徴して、甚しく「命令的な、決定的な、障得的な」教育の必要を思ふのであります。一方に於て私達はフレーベルが斯る方法の危険を私達に警告して、量り知られぬ貢獻を爲してくれたことを認めるのでありますけれども。

フレーベルは、教育は最初から「受動的、注目

的、保護的」でなければならぬと言ひます。私達は答へます「若し私達が教育の目的が何であるべきかを知つて居りさへしたならば教育は如何にもさうあるべきであります。私達はその目的を思ひつゝ常に「注目的」であるでありませう。又「保護的」であるでありませう、時によつては「受動的」でもあるでありませう。乍併、私達は、フレル自身からしてさうであつた如く、屢々命令的、決定的、障碍的であらざるを得ないやうに感ずるでありませう」

兎に角、つまるところ、私達は生徒をいゝ人にしたいと望んで居るのであります。私達は生徒が生れながらにして神性を持つてゐたか何うかを論議することを避けます。或る人は生徒は生れながらにして神性を持つと考へ、他の人は人間の子どもの生れ附きの特性の主なものの中性的であるか悪魔的であるかであると固く信じて居るのであります。

私達は「力と機能の調和的發達」に就て話すことを避けます、何故ならば或種の力と機能とは抑へられ、妨げられ、發達を阻害せられる必要があるからであります。

私達は又「定運」や「天職」や「自己實現」を話すことを避けます、何故ならば斯る言葉は身體的に精神的に將又道徳的に飢渴に瀕して居る我々の兒童の多くに適用する時に、緩弛ブルーズ的に見え又誇張的に見えます。私達は日常生活に用ゐられる普通語を用ゐることを好みます。而して私達の力の許す範圍に於て私達の生徒に善い人とすることを望んで居ると言へば足りるのであります。

教育の目的は「人格構成」であります。

この立場からすべての教育家を眺めかへしてみますと、私達はあらゆる種類の教育法則が此目的に標達する道路を指示して居ることを發見します。それらの多くは先づ最初フレルによつて作られました。而して其他のものは進んだ階段の

教育に關するものが主でありまして、それらはヘルバルトによつて作られました。

私達は英雄的な歴史的叙述が人格構成に與つて力あることを知りました——乃で私達はそれらを私達の企劃の中に加へました。私達は地理や自然研究の興味が惡に近寄ることを防ぐことを知りました——乃で私達はその興味を喚起することに努めて居ります。一般の興味の起源といふものを調べてみますに、私達はそれが（ヘルバルトとの言ふ如く）統覺に依つてゐて、それがために形式に走りすぎる學課によつては失はしめられるといふこと、又時としてそれはフレーベルの言ふ如く生れながらの外部運動、構成的衝動に依るといふことを知りまゝ、

ゝにして私達は漸次ベスタロツチやフヘルのよりもつとハッキリとした外廓を持つ私達の教育計畫を造り出して行きます、而して一面に於て卑しい商業的功利主義に陥ることを避

けると共に、他面に於て鹿爪らしい精神的な矇昧主義に沈潜することを避けるのであります。

ベスタロツチは教育の倫理的の包含を認めて居りました。彼の解説者に依りますと、彼は惡は仁愛や法律や説教では救はれるものではないと思つたのであります。教育こそ唯一の効果的な救治であると彼は思つたのであります。けれども彼は兒童の本質の中に萌芽として潜んで居る善の力を活動せしめ、兒童をして絶えず働かしむるところの、兒童の日常生活に基礎を置いた教育が必要であると考へたのであります。

フレーベルも同じ位の程度で述べて居ります。彼は創造力の教養を粗笨として不道德とを壓服するために、否寧ろ、それらの發達を妨遏するた

めに最も必要であると考へました。フレーベルもベスタロツチもこゝまで行つて居ながら何故教育の目的は「人格の構成」にあるといふことを公言することによつてこの問題を單化し

明化しないのであります。

ペスタロッチの組織に於ける他の缺點を考察する便利のために次に次に短い準備的の論議を掲げます。

圖畫、書方、粘土細工等は表出の形であります、算術や文法は心の體操の形であります、この二者は心が心的滋養物——觀念若しくは心像——を以て十分に充たされて居ることを豫想するのであります。他の言葉で言へば教育を容受する方の側が等閑視されてはならぬのであります。

今日の人々は多く「兒童をして自ら思考せしむる」と言つて居ります、しかし「心的努力を喚起する」といふことは心的滋養物を與ふべく相當の準備が爲されてゐないかぎりには有害となるのでありませう。お腹の空いて居る力士にめざましい競技を見せてくれと望むことは出来ません、それと同じやうに私達は心の空虚な兒童に表出的な線によつて獨自の心的努力を示すやうになぞと望むの

は亂暴であります。

ヘルバルト學派の人々は大體斯る調子でペスタロッチの形式的な、體操的な學課を攻撃するのであります。

心的滋養物は心的練習と同様に必要でありますまつたくそれは、より基本的に必要なものであります何故ならば心的練習は心的滋養物を豫想して居るからであります。

ヘルバルト學派に従へば興味も亦既に積まれた觀念の貯藏の存在に依るのであります、コメニウス以前の學課の主なる過誤の一つはそれが全然形式的であるがために心的機敏に資するところがあつても心を養ふことが出来なかつたといふ點に存するのであります。

然らば心は養はれねばなりません、けれどもその當適な食物としては何がいゝでありませうか、それには二つあります、——自然に關する觀念と人に關する觀念とがこれでありませう。

ペスタロッチは自然研究及それに類することを怠りませんでした(尤もこれに就てはペスタロッチは主として言語教育の根柢としてそれを行ふたのであると言つて彼を非難する批評家もあるやうであります)が必ずしもさうではないやうであります)けれども彼は他の大部門たるリアリスチックな研究——歴史及び文學に於ける人の研究——に對して何を爲したかと私達が尋ねるとき、その回答は決して満足なものではないのであります。

ペスタロッチはヒューマニズムの教育の爲めに何事をも爲しませんでした。歴史は彼の種々の原理に關聯して時折記さるゝに過ぎません、文學に至つては一度も記されたことがないと私は信じます。

彼はマシウ・アーノルドの如く、教育の興へることの出来る最も價値ある賜物は世界に於て嘗つて考へられたこと、言はれたことの最上のものと知り得ることであるといふことを知りませんでした

彼はエドワード・スリンダの如く、先生の仕事の一つ(恐らく最も重要な)は仙人^{フェアリーランド}郷を開くことであるといふことを知りませんでした。彼はローリエ博士の如く、「若し吾人が兒童に眞善美を兼ねた教育を施さうと思ふならば賢人聖者の言辭に親しましめるより外はない、文學の熟讀を通じてのみ人は過去に於て苦辛の結果を得られたものを所有することが出来、その種族中の最大にして最高なる者の友たることを得るのである」といふことを知りませんでした。

兒童の興味を惹く文學に對する彼の折にふれての感想は是等の考とは全然うらはらなものでありました。ペスタロッチ程の人が斯る謬見を固執してゐたとは殆んど信せられぬ位であります。

斯る方面をペスタロッチが全然閉却したといふのは全くルソーの影響であります、それにルネサンス時代の書籍病に對する彼の反抗も大いに手傳つてゐたのであります。ペスタロッチは四十年間本

を讀んだことがないと、言つて誇つて居りますが、彼も亦幼年時代には種々のものを讀まされて空想的資料を與へられたのであります。ベスタロツチはその組織の中に文學と歴史とを取り入れた居ないといふことは大なる瑕瑾であります。心的滋養物の必要を認めなかつたことが彼をしてこの誤解に陥らしめた所以であります。

近代の教育家は二三の例外を除くの外は皆大概「教養」と「力」との要求を平衡ならしむることに於て失敗しました。最高の教育的偉大の究竟のテストは恐らくこの平衡の力でありませう。ベスタロツチは決してこの平衡の力を持つて居りませんでした。獨逸に於てヘルバルトとフレーベル、スコットランドに於てローリイ、尙その他少數の極めて少數の——人々がこれを持つて居ります。

現代の改革家といへども多くは現代の問題が教養及び人格に關する事柄を體操及び力に關する事柄と調和させることであるといふことを夢想だと

して居りません。

ベスタロツチは此點に於て未だしであると私は今述べました、それは次ぎに示す彼の説いて居る教育家の任務といふ様なものを讀めば分ります。

兒童は開豁であるために反省するやうに教へられなければならない、狐疑的にならないために用心深くなければならぬ、乞食とならないために勤勉でなければならぬ、自ら安立して居られるために合理的でなければならぬ、之を要するにいづれの方面にまれ、兒童は何者かに成り得るやうに育てられなければならない。

ベスタロツチは兒童は高き情緒の感動（あざむ）を感じるやうに教へられなければならないと言つたことがありません。兒童は何物かでないければならぬ、兒童は役に立つものでなければならぬ、兒童は力を持たなければならぬ——ベスタロツチの言ふのはたゞこれだけであります。

フレイベルはベスタロツチよりも賢くあります彼の組織に於ては話、古傳——従つて歴史及び文學——は大切に取扱はれて居ります。

フレイベル學派の人々はベスタロツチに關して尙批評を加へて居ります、即ちベスタロツチの成績を感謝を以て認めると共に彼等は兒童が觀照を行ひ得るに至る以前に感覺や感情が發動するではないかと言つて居るのであります。まつたく其の通り、ベスタロツチは近世の「小學校の父」でありますけれども、フレイベルに蒙らざるべき名譽たる「幼兒學校の父」ではありません。この批評は肯綮に中つて居ります、けれどもあまり重要なものではありません。ベスタロツチは何でも彼でも出來るといふわけには行きませんから。

ベスタロツチの他の缺點、否可能的の缺點は兒童をして心的生活を築かしめんとする、賞讀すべき彼の希望に於て彼はあまり解剖に走りすぎる嫌ひがあることであります。尤も斯る缺點はフレイ

ベルにもあつたのでありますがベスタロツチは殊に文學や歴史を斥けて算術を重んじたのであります。

ベスタロツチは兒童の觀照の手始めには兒童をして自己の身體に注目せしめるのがいゝと考へました、これは「近いところから遠いところへ」といふ原理を應用したのであります。が少し考へ物であります、何故ならば兒童は自己の身體よりも外界に注目するのが自然であります。

この他まだベスタロツチに對する非難は澤山あります、細部の種々の事柄に關してはベスタロツチ程、批評家の標的にされる人は尠いでありません、けれども今更這麼ことを數へ立てるのは餘計な仕事です、それは今までに度々なされた仕事であります。彼の呼號、同時的の答に對して彼が過度の信頼を置いてゐたこと、一時に二つのことを教へやうとする企圖、課業の長さや何かに關する組織の缺乏、彼の學校に法則も秩序もなかつたこ

と——是等のこと及び其他のことは一般に誰でもが認めてベスタロッチの缺點とするところであり
ます。

ベスタロッチの追従者は尙この上に多くの缺點を曝露して居りますがこれはベスタロッチの關知するところではありません。

フレーベルの缺點に就てもかなり種々のことが言はれて居ります。

彼は要素を過重しました。彼は愚かしい象徴主義を結晶や植物や花の中に讀みました。しかし兒童の心の内には高い想像力のあることは疑ひのない事實であります、従つて象徴主義への多くの傾向を示して居ります。リヒテルは「兒童に取つては言ふ能はざることの象徴は言語よりもいゝのである」と言ひました。

フレートベルが彼の恩物の順序を規定する遣り方は殆んど錯誤無きことのかこつけか何かの如くに思はれるのではないかといふ批評家があります、フ

レーベルの原理は殆んど變ふべからざるやうに確固たるものであります、しかしこれにも今日の進んだ心理學的智識から見ると改竄を要すべき點がないでもありません。

それから又フレーベルが立方體に關して用ゐた言葉（安定の模型）及び球體に關して用ゐた言葉（運動性の模型）にはいくらかの誇張と神秘主義とがありはしまいかといふ批評家があります、私はフレーベルの如き偉大なる人に對して不敬の言葉を弄したくありません。彼の神秘主義は如何なる事實マタシオプファクトの立場よりも遙かに眞實でありませう、ブエウロウ夫人が「男子が、而かも子どもを持つたことのない男子が母親の感情を這麼に深く且つ親しく理解して居るといふのは殆んど奇蹟に類することです」と言つて居りますが私はたいこれだけでもう批評を中止しやうと思ひます。斯る人は婦人の生活に透入して行けると同じやうに深く兒童の生活にも透入して行けるに違ひありません。而

かも尙フレーベルの歡喜の多くはセンチメンタルな湧出よりも少許ばかり優ましであるといふやうに考へさせられることが時折ないではありません、彼は生涯の大部分を婦人と共に暮しました。而して彼は婦人に代つて種々の告白を爲したのであります。

コーンロープ・パウエン氏がフレーベルの唱歌五六篇に就て批評して居ります、彼はフレーベルの唱歌に就て大體次ぎの如き缺點を數へ立て、居ります、教育上には比較的重要なでない味覺と嗅覺とをあまりに多く扱ひすぎて居ること、暗黒の子供らしい恐怖を獎勵して居ること、或種の野性動物を憎んで居ること、唱歌に關聯する寓意の牽強附會であること、大體に於て詩的價値に乏しいこと等であります。

パウエン氏は更にフレーベルの唱歌にはキツカリとした順序がないと言つて居ります。一つの唱歌の中で先づ赤ン坊が抱かれて居るといふやうな

ことを唱つて、次ぎへ行くとその赤ン坊が忽ちに四才か五才位らしくなる、それから又二才に逆戻りをするといった調子なのであります。階段的發達を口にして居るフレーベルの唱歌に這麼缺點があるとは些か奇異の感じがいたします。

グラハム・ウオラス氏もフレーベルの唱歌のあるものを誹謗して居ります。

幼稚園の方法は非常に表出的であるために兒童の創造し得る「動原」モトを刺戟しすぎるといふ批評をする人があります。

幼稚園に於ける小さなデリケートな課業は生活の荒い勞働の本當な又は十分な準備ではないと言ふ批評家があります。フレーベル學派の人々は直ちにこの批評を否認するであります、兒童が若し愉快な活動に慣らされたならば彼等は後年に至つて生活の戦ひに於てよく戦ふであります。兒童を早熟の大人にしてつてはいけません。

書方や讀書に關してもフレーベルは幼稚園を終

へたばかりの「リナ」が如何に是等の必要な學術を教へらるべきかといふ考察に多くの頁を割いたのであります、フレーベルの原理は「何事もその時機に於て行ふべきこと、決して大早計に爲さざること」であります。

幼稚園の保姆は兒童を遊ぶにも働くにも他人にたよる、獨創性と自發性のない人形として了ふといふ非難があります。しかしこの非難は悪い幼稚園には當倣るかも知れませんが極力自發性の發揮に努めて居るフレーベルの理想から見れば氣なものといふことでもあります。

水田氏著『お話の研究』を讀みて

東京高等師範學校訓導水田光子氏の新著『お話の研究』は幼児教育上近來絶好の著述として、廣く家庭及び幼児教育者諸君におすゝめし度いと思ふ。

又フレーベルは兒童の遊戲から眞の自由を奪ふ、何故ならば彼の遊戲は技巧的であるからと。この非難に對しても前と同じ答をすればよろしいのであります。

幼稚園の兒童は落附きがない、言ふことをきかない、無性である、遊ぶことばかりを好む、又以上とは反對に幼稚園の兒童は質問をしすぎる、物を尋ねることをあまり好みすぎる。是等の非難に對しては殆んど答へることの必要を認めません。

(F.H. Hayward. The Educational Ideas of Pestalozzi and Frobel. Chapter II)

倉 橋 生

『お話』が幼兒の爲に如何に幸福なる世界であり教育上如何に貴重なる材料であるかは、更めて説くまでもない。之れは古く／＼から世界のあらゆる國に於て行はれて來た、最も自然的にして最も